

## コンラッドの実存主義的傾向について

秋 葉 敏 夫

ジョゼフ・コンラッド(1857~1924)は、多くの手紙を書き残した作家である。いままでに、重複も混ざるが、10冊に近い数の書簡集がまとめられ、それらはどれも、彼の交友範囲の広さや親密の深さを物語っている。じっさい手紙というのはすこぶる個人的なもので、それはただ儀礼的、表面的なものを除けば、なまなましく自己の内面に触れていると思われるのが少なくない。おそらくコンラッドの場合も、その例外ではないだろう。残された彼の多数の手紙は、作家の性格や普通の生活ぶりよりも、創作時の心理状態、あるいは人生、社会、文学などに関する思いといったものを、如実に伝えてくれるはずである。そしてそういう点で、たぶん彼のもっとも重要な書簡集のひとつは、スコットランドの貴族で当時の急進的な社会主義の信奉者、カニンガム・グレアムあてのものである。この小論をすすめてゆくのに、まずそのなかから、次のようなところを引用してみたい。

……私の方は、非常に暗い過去の奥底から未来を眺めます。すると私に許されているのは、ただまったく姿を消した主義、前途のない思考への献身だけだということに、気がつくのです。

同じように、そんなことを考えないときもたびたびあります。なにもかも消え失せてしまいます。残っているのはただ真実——姿をとらえることのできない、不気味で不明瞭な影——だけなのです。私はなにも後悔しません——私はなにも期待しません。それというのは、後悔も期待も私の性格にはなんの意味も持たないことが、わかっているからです。

私が自分自身のために使うのは、合理的で烈しい利己主義です。そのなかで、私は休息するのです。するとまた、あの考えがもどってきます。ふたたび例の生活が始まります。いろいろな悲しみ、いろいろな思い出、それに夜よりも暗いひとつの絶望が<sup>1)</sup>。

この文章は1899年2月8日付の手紙からで、コンラッドの創作状況について述べると、彼はすでに、前期の作品群、『オールメイヤーの阿房宮』(Almayer's Folly, 1895)、『島の流れ者』(An Outcast of the Islands, 1896)、『ナーシサス号の黒人』(The Nigger of the 'Narcissus', 1897)、『不安の物語』(Tales of Unrest, 1898)などを出版している。そして作家の問題意識の凝縮されたような傑作中編『闇の奥』(Heart of Darkness, 1899)を、彼がちょうど書き終えたところである。引用の前半は政治的議論に関連しているが、後半はかなり一般論的なものとして読むことができる。つまりコンラッド自身、人生をたんに悲劇的意味に理解するのではなく、もはや絶望への段階にきていることがほぼわかる。問題は、しかしながら、彼の悲観主義あるいは虚無主義の告白といったものに、あるだけではない。「残っているのはただ真実——姿をとらえることのできない、不気味で不明瞭な影」とか、すぐあとに出てくる「残酷な真実<sup>2)</sup>」ということばが、彼の意識の要約にちがいないからである。しかもそのことばを、おそらく、作家の抱く人間運命の悲劇性はもとより、人間を取り巻く危機感の表明とみなしても、いっこうに差し支えないだろう。彼にとっての苦しい作業は、多かれ少なかれ、それとのつらい闘いの様子を、たくみなドラマ化で提示することである。

そしてコンラッドの場合、現代小説の先駆者として、彼はさまざまな小説技法——たとえば物理的時間の逆転、語り手の使用、極限状況を作る空間の処理、あるいは象徴的イメージの援用など——を試みるわけで、それについての考察はまた別の機会にゆずる。話の中心はあくまで、その「残

酷な真実」、「不気味で不明瞭な影」にあり、作家の不安な、暗い意識に関係している。じっさい彼のドラマ化の特徴は、そういう「真実」や「闇」に対するひとつの認識過程を描くことといえるだろう。そのうえ彼の対象の中味が、その豊かな作品群からやや具体的に、「悪」というべき人間精神の暗い奥底とか、政治的世界の非情さや背徳といったものにあることもわかる。ただしものごとはそれだけで終わるのではなく、それらの追求はさらに、その破壊的な力による人間存在のはかなさ、みじめさという、存在論的テーマを含んでもくる。いったい文明人とか野蛮人、身分や階級の相違を問わず、コンラッドの見つめる「人間の条件」とはなにか。ジョン・パーマーのことばを借りると、その「人間の状況を定める、いくつかの形而上学的、認識論的<sup>3)</sup>条件」はどんなものか。問題は人間を取り巻く世界にもおよぶわけだが、そのような問いかけに対する、作家自身の答えというべきものを、次に2、3引用しておく。

『……運命。ぼくの運命！ それにしても、なんとふざけたものだ、人生というのは——空しい目的のために、冷酷な論理を、ただ意味ありげに整えたというにすぎない。そしてそれから期待できるのは、せいぜい、自分について少し知ること——それもきまって、手おくれになるのがおちだが——どうしても消えない、たくさんの後悔の気持<sup>4)</sup>だけだ。

……道徳もなければ、知識とか希望といったものもありません。あるのはただ自分に関する意識だけで、そのために私たちは、凸面凹面どちらの鏡で見るにせよ、いつもただ空虚でつかの間の見せ掛けにすぎない、ひとつの世界のあちらこちらへ、追ひ<sup>5)</sup>払われるのです。

……あなたはまじめな気持で、加害の意志をもって、あの無意識の男に考える力を養わせようと思うのですか。そうすると彼は、ものごとを

意識するようになります——そしてずっと小さな人間に——また非常に不幸な人間になるでしょう。

あなたは本当にそういうひとに対して、「自分自身を知れ」といいたいのですか。自分がひとつの影よりもくだらなくて、太洋のひとつくの水よりも無意味で、夢の幻影よりもはかない、つまらない存在であることを理解せよと。本当にそう<sup>6)</sup>いいたいのですか？

ところで、ひとくちに実存主義といっても、その種類はさまざまである。大ざっぱな分け方だが、キリスト教的実存主義もあれば、無神論的実存主義もある。しかしどんな実存主義も、まず第1に、自然の哲学であるより人間の哲学であることに変わりはない。そこでそれらの共通項をまとめてみると、実存主義哲学とはそもそも、人間運命の悲劇性に基づく、人間存在についての鋭い関心から出発しているといえるだろう。そしてこの哲学を、不安や悩みやそれとの苦しい闘いなど、不幸に運命づけられた人間存在の認識と、その「人間の条件」をバネとする、積極的な行動の哲学だと捉えることができる。実存主義者たちにとって、人間存在の特徴は、たとえば次の3つのことは、根源的な偶然性、究極的な無意味、絶対的な無価値などであらわされる。そしてこれらの特徴の意味するものは、人間は自分がなぜ実存するのかを知らない、自然からも社会からも疎外された存在だということである。それにまた、この意味の内包する根源的な不安定性によって、人間はたえず、自分の不安定な状態を意識させられる。したがって人間というのは、まず時間と空間で限界づけられていて、有限の苦の世界にひとり放り出された、孤独で無力な、はかない存在といったものにすぎない。人間が不幸なのは、なにも政治や社会が悪いからではなく、人間であることを証明する、その根源的な「人間の条件」のせいである。幸福を得ようとするには、ひとは人間であることをやめ、その重荷を放棄しなければならぬ。

しかしながら、実存主義は虚無主義でも絶望の哲学でもない。少なくともその意図において、実存主義が「生きること」の恐怖と無価値の、絶望的な認識だけに終るわけではない。そうではなくて、重要なのは、これがさらに、苛酷で不可避な「人間の条件」に対する悲劇的感覚をテコとして、「生きること」の価値を肯定しようとする哲学だという主張である。実存主義者たちはまず冷徹な態度で、不安定な人間存在の宿命を認識し、それを受け入れる。そして彼らの見つめるのは、ほかでもない、厳しい「人間の条件」やそれとの悪戦苦闘そのものである。なぜなら彼らにとっては、その苦悩に満ちた闘いそのものが、人間の価値を作り出すからである。そしてここに、自由な選択や創造的行為の意味も生まれてくる。実存主義者たちの抱くのは、それ故、こういう価値、「生きること」の努力を肯定するその価値が、絶望や自暴自棄から人々を解放する助けになる、といった信念と考えてよいだろう。実存主義とは、その働らきかけにおいて、人生からの逃避ではなく、人生への積極的な参加、人生への挑戦の哲学である。

コンラッドは深遠な大思想家ではないし、理路整然たる哲学者でもない。それにまた、彼自身、実存主義的思考を論理的に展開させたというわけでもない。この作家が実存主義的傾向を帯びていると考えられるのは、ただ彼が自分なりの「人間の条件」にからむ存在論的テーマを、多かれ少なかれ閉じられた世界で、もたもたとドラマ化したときぐらいにすぎない。彼にとっては、性格的に、おそらく抽象の世界は不得手であって、エッセイや手紙における純形而上学的議論には、思考の乱れや飛躍が散見される。そして彼の暗い意識とか鋭い悲劇的感覚も、透徹した直観と思考の産物というより、その現実の悲劇的体験の占める要素がかなり多いだろう。コンラッドの幼少時を振り返ると、じっさい彼は、小国ポーランドの悲惨な運命の嵐のなかで、生まれ育った人間である。当時ポーランドは帝政ロシアの支配下であり、父親はその圧制に対する独立運動の参加者として捕えられ、幼ない少年は極寒の流刑地に同行する。そして彼は病弱の母親をそこ

で失ない、やがて11才のとき父も病死して孤児となり、叔父の家にあずけられる。彼自身頑強な身体ではなかったらしいが、それから数年たつと、ひとつには政治的迫害を逃れる意味もあって、16才の少年は故郷を去り、他国の船の下級水夫として世界中を駆けめぐることになる。そして重要なのは、その体験の豊富さとともに、人間形成にあずかる青年期までの彼の体験が、おそらく孤独や屈辱や艱難辛苦の連続だったろうということである。なぜなら感受性豊かな人間にとって、その影響の小さいわけではないからである。それ故彼が自分なりの「人間の条件」を見つめる目は、たぶんこうして、ほぼその方向が定まる。そしてそれは、のちのさまざまな体験、とくに征服者の意のままに翻弄された原住民の悲惨な運命と出会う、コンゴ河遡行を経て、より確かな、暗いものになったといつてよいのではないか。

コンラッドの作品のいくつかは、その豊富な体験の追体験であり、その「人間の条件」に関する暗い意識のドラマ化である。物語の世界は、それ故、必然的に多方面にわたり、登場する人物も、中心的な女性は比較的少ないものの、人種の壁を越えて種々様々になる。ただ舞台はいわば閉じられた世界で、それが陸上、船上どこであろうと、その暗い意識が語り手の口から代弁されたり、多かれ少なかれ、人びとのたどる運命に反映される。そして彼の場合、この世界は、早くも初期の作品で暗示されるように、いってみれば、ひとつの空虚な幻影の世界である。そのうえ、これはまた、多くの作品に共通することだが、なにか残酷な巨大な力で、人間存在を圧倒する以外のなにものでもないだろう。描かれる人びとはほとんど孤独で微笑がなく、それぞれなにかに追い駆けられもてあそばされる、か弱い存在にすぎない。そして不安におののく彼らにとって、なにか救いとか助けと呼ばれるものが見つかることはめったにない。彼らが最後に直面させられるのは、多かれ少なかれ、この奇妙な世界に取り囲まれた、彼ら自身の真のすがたである。そしてコンラッドの場合、「自分自身を知れ」というのは、この世界の不可解、不条理を見つめ、人間存在の無意味、無価値を認

識せよということである、1897年12月20日付の手紙のなかで、彼自身、この世界創造の営みをメリヤス編み機のそれにたとえる。彼のことばを借用すると、「それが私たちの内部を編み出し、私たちの外部の世界を編み出すのです。それは時間空間、苦痛、死、墮落、絶望、それにすべての幻想を作り出しました——そして重要なものはなにもないのです。」<sup>7)</sup>

したがって問題は、人間の世俗的幸福達成のために、その自然的物理的環境を変革せよ、といった種類のものではない。あるいはまた、そのために、政治や社会の諸制度を改革せよという性質のものでもない。コンラッドの場合も、人類進歩への懐疑は根強いが、ものごとはさらに深く、世俗的幸福の価値とか存在に関する、問い直しを含んでいるのである。そして忘れることのできないのは、人間はじっさい、その幸福への願いの裏切られる世界に生きているという事実であり、それでもなんとか生き続けなければならない、といった信念だろう。そこでまえのことばを使うと、なものをも創造する不可解な機械がそこにあり、不条理な世界につかの間の生を受けた、無価値な人間が住んでいる。しかもエドワード・W・セッドのいうように、この「人間存在は、人間もメリヤス編み機も相手に恩恵を施すことのない、ひとつの悲劇的な共同体である。」<sup>8)</sup> それは偶然そこにおかれただけで、ほかのものから疎外されている。すると、次のような問いかけが自然に生まれてくる。つまり人間を取り巻く状況がもしこういったものなら、人間はいったいどんな心構えで、それに対処したらよいというのか。コンラッドはそのことについて、およそ3週間ほどあとの手紙で、同じ機械の比喻を用いながら次のように述べる。

「舌をたらして（死んでいた）」でなぜいけないのです？ 本当に当然ですよ。そしてそれでも、あの機械は動き続けることでしょう。問題は男性的努力の疲労が、ひとときの軽蔑の喜びに値するかかどうかということです。あるいはほかに、軽蔑とか愛とか嫌悪が、そのように空虚な幻

想のなかで、正当視されるかどうか疑問が出るかもしれません。その機械は空気よりも薄っぺらで、稲妻のようにはかないものなのです。冷たい無関心の態度がただひとつの合理的な態度です。もちろん理性は憎むべきです——でも、どうしてでしょう？ なぜならそれは（勇氣ある人びとに対して）、私たちは生きていのに人生に参加していないこと——それからまったく孤立していることを証明するからです。

人生に対する「冷たい無関心」というのは、ものの真実に目をふさぐことである。そこには知識とか思考についての懷疑も含まれ、いわゆる人間が醒めることの否認も暗示される。そして「考えること」は生きるための敵であり、消極的な逃避こそひとつの便宜上の防衛策とみなされる。ところが実存主義とは、そもそも精神の活動といえるものだし、それに基づく行動の哲学である。実存主義者にとって「考える」とは「生きること」であり、これはとりもなおさず苛酷な「人間の条件」を直視して、それをなんとか乗り越えんと努める生活を意味する。そしてその際の特徴的性質は、程度の差こそあれ、「強さ」とか「烈しさ」といわれるものである。コンラッドの実存主義的傾向がややもすると薄いように感じられるのは、おそらく悲観主義におおわれてしまい、そういった点の弱さが、ひとつの大きな原因としてあげられるだろう。彼の多くの作品のうち、じっさい、存在論のこの点を中心に扱かうものは、短、中編も含めて、ほんの2、3を数えるにすぎない。しかもそれらの作品でも、多かれ少なかれ、無関心や逃避を許してもらえないで行動に駆り立てられる、あるいはそれに巻き込まれるといったような、いわば消極的性質が目立っている。ところがコンラッドの場合、その消極性はそれとして、まさにそんな状況下の行動とその必要を描くことで、彼も自分なりの「人間の条件」を克服しようと努めるのであり、その模索の跡を行動への、さらに人生への信頼というかたちで示して、実存主義者のすぐそばまで近づくのである。そして彼の後期の長



編『勝利』(Victory, 1915)は、主人公ヘイストがいわゆる「生きた」末の、そのような認識のために、存在論的問題を中心に扱かう作品の、代表的なものといえるだろう。それは作家自身もっとも好んだ作品のひとつで、ジョスリン・ペインズのことばを借りれば、「主人公の防禦的よるいを、人生が少しずつ無慈悲にはぎとり、最後には自分のとった態度が不適当なことを悟らせる物語<sup>10)</sup>」である。

しかしながら『勝利』は、その問題意識の方が作家の創造力よりまさった感じで、作品としてはけっして出来のよいものではない。コンラッド自身のいつもの苦心にもかかわらず、『勝利』には、後期のほかの作品同様、創造上の安易さが目につき、その緊張度の欠如がうかがわれる。たとえば小説技法の面において、時間を逆転させたり、視点の移動や象徴的イメージの援用というように、いろいろな試みはあるのだが、おざりな偶然性の多用が、物語の雰囲気をそこなってしまう。プロットの力は、それ故、やや弱いもののように思われるし、物語の展開は作品が大部のわりには比較的単純である。そして『勝利』には、恋愛、駆け落、嫉妬といった一般受けするメロドラマの諸要素があって、少し悪くいえば、それらが読者に迎合するかのようになり、冗長なことばでだらだらと述べられてゆく。そのうえ問題となるのは、とくに、この世のものとは思われない、3人の戯画的な悪漢たちだろう。コンラッドは『勝利』につけた「作家の覚え書」のなかで、彼らは現実に出会った人物からの創造だということを強調しているが、それは結果的な弁明にすぎないかのようには聞える。作品の中心となる主人公の深刻な悩みや問題も、彼と喜劇的で薄っぺらな3人との闘いで、効果はかなり弱められる。しかもこの悪漢たちに、「世界そのもの」とか「ひとつの運命」といった象徴的な意味合いを背負わすために、作品全体<sup>11)</sup>がなにか軽い、安っぽい感じのものになってしまう。それで作家自身の意図は充分すぎるほど伝わるのだが、問題は結局、『勝利』そのものの特徴とも考えられる、リアルな状況とアレゴリカルな側面との融合に対して、

いささか疑問が残るということであろうか。

それはとにかく、ここで物語を簡単にまとめておきたい。主人公のアクセル・ヘイストは、東洋の魅力にとりつかれて放浪する、いまはもう中年の孤独なスウェーデン人である。彼は虚無的な哲学者の父親に育てられ、その死の直前には、人生の傍観者、人間不信の態度を勧められる。そして東洋に来た彼の、マライ群島周辺での生活は、その忠告通り、まさに人間世界との接触を絶ったものだった。ところが生まれつき旺盛な同情心のため、用心していた彼も、その渦のなかへ巻き込まれることになる。まずはじめは、たまたま、罰金の支払いに苦しむある船長を助けた関係から、ヘイストはその貿易事業や鉱山会社設立に手を貸す。そして船長が資金調達に心労で倒れると、世間ではヘイストのそんな行為に対して、さまざまな中傷や悪口がばらまかれる。だがその会社は資金繰りの悪化で解散し、やがて彼の消息も聞かれなくなって、彼もどうやら、また人間世界から逃がれることができたかにみえる。しかし偶然と彼の同情心が災いして、彼はふたたびその世界に引きずり込まれる。ヘイストは仕事でホテルに滞在中、雇い主にしいたげられ、ホテル経営者ジョンバーグに言い寄られていた、女性楽団のひとりの少女を助け、彼女を自分の島へ連れ出してしまうのである。『勝利』の物語の中心は、だいたい、彼のこの行為をめぐる経緯で、それがややはややかな表面の底に、「生きること」の意味への問いかけをからめて展開される。

ヘイストの島はほかから隔絶された世界であり、人間生活がくっきり浮かび上がるための、ひとつの舞台である。ヘイストと少女とのややとまどいがちな、平穏な生活は、ただし、長続きはしない。ある日その島に、薄気味悪い3人の悪漢たちが到着する。彼らは嫉妬と憎悪に燃えるジョンバーグの奸計で送り出された人びとで、この島に財宝が隠されていることを信じている。しかも彼らは、その隠匿者がヘイストだと教えられているのである。物語は急に活気をおびたものになり、主としてヘイストと3人の

悪漢たちの闘いへ移る。そして襲撃の恐怖や危機感を混じえ、その悪漢たちとの闘い*にい*わば「現実との闘い」の意味を重ねながら、少女リーナの献身的な愛のすがたが描かれる。つまり少女はヘイストを本当に愛しており、自分自身を犠牲にして、彼の危機を救うのである。ところがヘイストの方は、人間不信を植え付けられ、人間との交際を長い間絶ってきたので、そういう彼女に対して、どんな態度をとったらよいのかわからない。少女の死に際し、彼は愛のことばをささやくことができず、自分の冷えきった心を呪わずにはいられない。結局、仲違いで悪漢たちが破滅したあと、ヘイストは住居に火をつけて自殺する。

物語ストーリーというのは、多かれ少なかれ、主題の提示と切り離すことができない。コンラッドの場合も、それがただたんに素材を展開させるための枠組にすぎない、というわけではない。彼の物語は読者を精神の奥底にまで導く試みであり、じっさいそのいくつかは、ものごとに対するひとつの認識過程を扱っている。そしてさまざまな小説技法は、効果的表現のために案出された、彼なりの認識の方法を示すといってもよいだろう。『勝利』で描かれるヘイストの物語は、比較的短かい彼の人生の最後の部分を中心に扱ひ、結局のところ、その「生き方」の答えである。前提となるのは、時間の操作によって、冒頭から3分の1ほどすすんだとき明らかにされる。それはヘイストの生活態度を決定する重要な場面だが、多くの批評家のいうように、説得力の欠けた、その動機付けの弱さを否定することはできない。ただしこの描出はまた、少なくとも、作家コンラッドの問題意識の吐露でもあるので、デント版全集では15行ほどであっさり説明されるその部分を、次に引用しておく。

あの晩、雲ひとつない空に月が浮かんで、どす黒い、薄汚れた町を照らしていたとき、彼の父親は思いのほか気分がやわらいでいた。

「それじゃ、お前にはまだ信じてるものがあるんだね？」父親の声は

はっきりしたものだだったが、最近はますます力強さを失ないかけていた。

「たぶん、人間とかひとのなさけを信じているんだな？ でも、なんでもむらなく完全に軽蔑すれば、そういう感情はすぐにも消えてしまうよ。ただお前はそんなとこまでいってないから、憐れみと呼ばれるかたちの、あの軽蔑の態度を養うといいんじゃないかな。それがおそらく、もっとも簡単なやり方だよ——つまりお前もまた、もしこの世に生まれてなにか意味があるなら、ほかの人びとと同じように哀れむべき存在だということ考えをいつも肝に銘じておいて、それでも自分のためには、憐れみをいっさい期待しないということだね」

「それじゃ、じっさいどうすればいいんですか？」青年は父親をじっと見つめながらため息をつき、身体をこわばらせたまま背の高い椅子にすわっていた。

「傍観しているんだよ——だまってじっとしているんだね」この忠告が彼の父親の、世間からは少しも相手にされなくとも、死ぬまで恐しいラッパを吹き続け、天地を廃虚で満してこの世の無意味を訴えた人間の、最後の<sup>12)</sup>ことばだった。

父親の教えと自分の選択によるヘイストの「生き方」は、いうまでもなく、彼なりに人生を放棄すること、人生からのひとつの逃避である。そして広い意味で、これは現状維持の方向を示し、世間の動きから自分を守ろうとする防禦的姿勢を表わす。ところが『勝利』で描かれるのは、その態度が不可能な願いにすぎないこと、人間は多かれ少なかれ現実の苛酷な動きに巻き込まれる、といった種類の考察だろう。それに少女リーナの犠牲的行為を通し、愛のひとつの側面が、「生きること」と結びつけられて提出される。つまり「愛する」とは、ほかの人間とつながりを持つことであり、それはとりもなおさず、「人間を信じること」を意味する。そして「人間を信じる」というのは、ひとつには、連帯感の助けを期待し、いわゆる

悲劇的な「人間の条件」と対抗して、「なんとか生きること」への意志を表わす。『勝利』におけるリーナの役割は、人間不信に陥ち入っているヘイストに、この「愛すること」の意味を伝え、「生きること」への希望を持たせようとするものである。表題の『勝利』というのは、直接的には、悪漢のひとりだましてヘイストを助けた、少女リーナの「勝利」だが、アレゴリカルには、ヘイストの「生き方」のあやまちを彼に気づかせた、リーナの「愛の勝利」である。しかもこれはまた、彼が少なくともそのような認識に達したという意味で、たとえば『闇の奥』のクルツの場合と同じように、ヘイストのひとつの「精神的勝利」といってもよいだろう。遠大な理想を抱いて暗黒大陸に乗り込んだクルツは、死の直前、自分のいままでの行為すべてを振り返り、それをただ「恐ろしい！」ということばで要約して、自分のたどるべき場所を地獄だとほのめかす。そしてその場に立ち会う語り手のマーロウは、こういったクルツの態度を、その力強さ、その妥当な認識ゆえに、とにかく彼の「精神的勝利」だと考えるのである。<sup>13)</sup>『勝利』のヘイストは、最後に、「ああ、デイヴィドソン、若い間に、希望を持つこと、人間を愛すること——そして人生を信頼することを学ばなかった人間には、ろくなことはないな！」<sup>14)</sup>という悟りのことばを残している。

すでに触れた通り、『勝利』はいかにも欠点の多い作品である。その理由についても2、3述べておいたが、それは要するに内面の問題意識をうまくドラマ化できない、作家の創造力の欠如によるところが大きい。したがってこの欠点を救うのは、その問題の身近かさであり、まさに存在論的テーマに悩む永遠の現代人、ヘイストの人間的魅力と終局のその悟りのことばと考えるとよい。そして『勝利』を支配するのが第1次世界大戦勃発時の重苦しい気分だといった思いは、たいして重要なものではないだろう。おそらく敵国人ジョンバーグの性格創造などを中心に、その影響は多少見られるかもしれないが、問題はそのことを契機にしているというわけでは

ない。コンラッドなどもともと、その心の奥底には、人間のささやかな平安を脅やかすものへの、嫌悪や危機感が根強く潜んでいる。『勝利』で扱われるのは、神なきコンラッドのそんな意識そのものであり、それは結局現代知性のひとつの傾向、自己の依拠するところを見失ない、なにか確かなものを探し求める知性の代弁といってもよい。そして人生からおりたあとのヘイストに見られる、現実受容の態度は、作家の捉える、そのひとつの方法だとみなすことができる。実存主義者の確信と呼ばれるものと、この人生放棄の果てにふたたび人間を愛し人生を信頼して、現実との闘いに価値を見出すヘイストの悟りとは、いうまでもなく、重なるところが多い。コンラッドの文学の魅力は、たぶんだれにも負けられない、問題意識の真摯な追求にあるが、それはこの長編にもあてはまることである。『勝利』は彼の作品のうち、存在論的テーマを扱かうものの最後で、まえにこの問題に悩み、自殺する人物が描かれたのと違って、これは諦めからは遠い、そのひとつの結論であり、作家自身の願いの込められたものになっている。

実存主義とは、ある意味で、エネルギーを失くした理想主義の反逆だし、多かれ少なかれ、幻滅の緩和とか不安からの解放といったものを目ざしている。そしてその結果、これはいわば、現在から未来を志向する、新しいロマン主義的側面を持つことになる。コンラッドの場合も、けっしてその例外ではない。彼のドラマは、もともと、表面のはなやかさとはうって変わった心理的なドラマであって、ひとつの精神的な闘いが扱かれる。

『勝利』では、「人間の条件」に関する苦悩と現実そのものに対する闘いがあり、希望を失なった者の生活とその非を悟る、心底からの認識がある。それにこの認識は、コンラッドの存在論的テーマのひとつの結論ともなり、彼の行動信頼への傾斜を端的に示すものでもある。おそらく彼の実存主義的傾向はけっして強いものではないが、これはその思索の質において、哲学者のそれとたいして異なるわけではないだろう。コンラッドのそういった傾向は、繰り返すまでもなく、人生の悲劇的感覚に基づいて、その揺れ

動く意識をドラマ化する作家の、本質に触れる問題だと思われる。

## NOTES

ジョウゼフ・コンラッドの作品は、現在の Dent's Collected Edition, London による。

- 1) C.T.Watts(ed.): *Joseph Conrad's Letters to Cunninghame Graham*, Cambridge University Press, 1969, p. 117.
- 2) *Ibid.*, p. 118.
- 3) John A Palmer: *Joseph Conrad's Fiction, A Study in Literary Growth*, Cornell University Press, 1968, p. 167.
- 4) Joseph Conrad: *Heart of Darkness*, p. 150.
- 5) C.T.Watts(ed.): op. cit., p. 71.
- 6) *Ibid.*, pp. 53—54.
- 7) *Ibid.*, p. 57.
- 8) Edward W.Said: *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography*, Harvard University Press, 1966, p. 36.
- 9) C.T.Watts(ed.): op. cit., p. 65.
- 10) Jocelyn Baines: *Joseph Conrad, A Critical Biography*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1967, p. 395.
- 11) Joseph Conrad: *Victory*, p. 379.
- 12) *Ibid.*, pp. 174—175.
- 13) Joseph Conrad: *Heart of Darkness*, p. 151.
- 14) Joseph Conrad: *Victory*, p. 410.